

生活環境改善が必要なモーリタニアのオアシス生活

パリからの飛行機が徐々に高度を下げつつある。窓から見える風景は砂丘とそこに点在する土塀の家々のみであった。モーリタニアの首都、ヌアクショットは人口 50~60 万と記憶していた私の頭の中には、ある程度の高層ビル、舗装された幹線道路を予期していたが、全く予想を覆す光景が眼下に近づいてきた。今年の 6 月から JICA の調査で、現地を訪問するチャンスを得た。これまで湾岸の砂漠地を何回となく訪れる機会を持っていた私の砂漠への印象とは、かなり異なった砂漠の国「モーリタニア」であった。

調査地域はモーリタニアでも内陸部に位置するオアシス地帯で、年間降水量は 100mm 以下の極乾燥地である。いったん風が吹くと砂がどンドン目に飛び込んでくる。暑さはそれほど感じなかった。現地には必ず 4 輪駆動車 2 台以上で入る。砂丘地を通るため非常時に備えての行動である。道なき道を通り、車が転倒しそうな崖を降り、どれほどのオアシスがあるかと思いつつ進む先に数千人規模の村がある。

調査時期は雨期に入る直前であった。この時期、住民の食生活は最も困窮を極める時期である。現地で見えたスーク（市場）には緑色野菜はほとんど皆無であった。現地産の岩塩、ジャガイモ、穀類、それに乾燥したニンジンやタマネギ等が細々と売られているだけであった。村によっては産婆さんもない、もちろん医者や薬局があるわけではない。交通手段も 4 輪車がタクシーとトラックを兼ねた形で 1 日数便程度行き交うだけだろう。調査中、ある団員は危篤の妊婦を町の病院へ運んだ。しかし、彼女は死んでしまったとあとで聞いた。言葉では表せない住民の日常生活の困難さを感じる。

このような厳しい環境の中で住民は出来る限りの努力を行いながら生活をしている。少ない井戸水を使って、デーツを栽培し、家畜を飼育している。井戸周りの半畳ほどの畑で野菜作りを行っている。太陽光を使った電灯やポンプも見た。全て大切に使われている。また、農地の周りには防風・防砂の植林をあちこちで見た。

これまで経験してきた湾岸地域の砂漠では、住民が高級車を乗り回し、舗装された道路が整備され、どこへ行っても冷たいコーラと冷房のある部屋を見いだせた。モーリタニアの過酷な生活を続けている住民からは調査団へも多くの希望が出される。オアシス地域での生活改善を目指すこの計画で、住民の伝統を生かしつつ、現地の限られた地域資源の有効活用と住民の自助努力で、なにがどこまで出来るかを考えると、緊張する一瞬であり、また仕事の重要さを感じさせられる。

（モーリタニアのオアシスで：財津）



スークで売られる物品（岩塩、豆、タマネギ等） オアシス組合との会合（青い服が組合長）